

logue

鳴
海
章

Shō Narumi

徳間書店

Tiger

棘

工業学院図書館
蔵書章

鳴海
章

Sho Narumi

棘

第一刷——2000年9月30日

著 者——鳴海 章

発行者——徳間康快

発行所——株式会社徳間書店

東京都港区東新橋1-1-16

郵便番号105-8055

電話 (03) 3573-0111 (代表)

振替00140-0-44392

(編集担当) 磯谷 励

印 刷——長苗印刷㈱

名バ ー 刷——近代美術㈱

製 本——ナショナル製本協同組合

©2000 Shō Narumi, Printed in Japan

乱丁・落丁はおとりかえ致します。

ISBN4-19-861234-X

棘

主な登場人物

麻生里久 緑丘第三中学の国語教師。人妻。夜はデートクラブで働く。

風間 悠 作家。恐妻家。毎月、里久を「買って」弄ぶ。

麻生孝徳 別居中の里久の夫。妻子を捨て、当時二十歳の里久と結婚。

国井恵美 里久の同僚。夫の弟と不倫交際。

種田 〃。理科教師。里久に「興味」津々。

吉村 〃。体育教師。おどおどした態度が周囲を苛つかせる。

加納智史 里久の教え子。担任教師を「妄想」の対象にすることが止められない。

辰巳 智史のクラスメートで優等生。しかし、智史いじめのリーダー格。

渡部 智史の同級生。いじめグループの一人。

安西 智史の同級生。いじめグループの一人。

相良夫人 里久に客を仲介する、デートクラブ経営者。

高梨 外科医。里久の客。

スコープオンマン 金属バットで殺しを続ける黒づくめの男。

装幀／熊澤正人

フロローク

午前八時十二分、いつものように君は、灰色のロッカーがならんで、納骨堂みたいな玄関にあらわれ、黒のパンプスからブルーのスニーカーに履きかえた。とがった襟のついた、ノースリーブの白いシルクブラウス、腰と尻にびったりはりついた黒いスカートに黒のストッキング、手には藍色に染めた麻のジャケツを持ち、茶色のシオルダーバッグを肩に提げていた。ノートや資料で膨らんだシオルダーバッグは重そうで、ストラップがあたっているシルクブラウスにはしわが寄っていた。でも、重そうなバッグのおかげでいいこともあった。君が右手でバッグのストラップを肩にかけなおしたとき、脇の下からブラジャーがのぞいた。淡い水色だった。細かな刺繍がしてあった。瞬間、ブラジャーが食いこむ君の肌の柔らかさとぬくもりと匂いを感じたような気がして、君のブラジャーになれば、どれほど幸せだろうと思った。

黒いスカートに黒いストッキングという組み合わせは、生理が近いしだね。ずっと記録を取っているのだからにはわかっている。でも、今月はまだ来ていない。生理が来れば、一目でわかる。血を喪ったときの君は、顔が透きとおるように白くなる。自分では気づいていない

かも知れないけれど、唇の色まで白っぽくなったときの君は、この世のものとは思えないほどに美しい。気だるげな表情で、黒い眸^{ひとみ}が潤み、かすかに開いた唇から白い歯がのぞいているのを目にしていると、どこか知らないが、君のいる世界へ行ってみたくなる。それで命を失ったとしても後悔はしない。

ストッキングにつつまれた君のふくらはぎは、どこをとつても優美な曲線で構成されていて、すべすべとした皮膚の下に赤黒い筋肉があることを想像させない。君の脚を胸に抱き、撫で、頬をすり寄せ、賞賛し、口づけるところを何度思えがいたろうか。

君は、君の眸や肌や脚や声や指先のちよつとした動きがどれほど賞賛に値するものかをまるで知らない。人の生命さえ左右しかねないほど危険に満ち満ちていることをまったく理解していない。美を蔑^{ないがし}ろにしていることの罪を、そろそろ君に教えなくてはならないときが近づきつつあるようだ。

君の美しさを賞賛する嘆息で、ほくの胸は張り裂けそうだ。

しかし、君にとってほくは存在しないに等しい。好かれない、愛されたいなど夢にも思ったことはないし、嫌悪されることさえ望むべくもない。君の眸に、ほくは映らない。存在していないほくが君に手を伸ばすなど、夢のまた夢、百パーセント不可能だね。わかっている。だから、手が届かないのなら、目を向けてさえもらえないのなら、いつそ君自身を虚しくしてしまいたい衝動に駆られることがある。

君は、美しすぎる。まぶしく輝いている。
ぼくは暗闇に沈んでいて揺れている。揺れている。

セックスをしていて、一度も〈イク〉という感覚を味わったことがない。バイブレーターなら震動に身をまかせているうちに、頭の中は真っ白、気がつけば失禁していることさえあるのだが……。とにかく誰に挿入されていても、自分が単なる肉の筒として利用されているとしか思えなくて、それで枕元の電気スタンドの黄色い光をながめていたりする。相手が汗まみれになつて動いているというのに、どこからか聞こえてくるサイレンに心奪われていたこともあった。

男と女の行為に熱中でできなかった。

ある男には不感症と罵^{のの}られた。別の男には、女が好きなのだらうといわれた。

どちらも間違っている。相手を信じられずに心を開けるはずがない。自分を閉ざしているところにエクスタシーはない。ベッドに横たわっている間、胸の奥深くにある音に耳をかたむけているのがつねだった。吹きすさぶ風の間から切れ切れに聞こえてくるサイレンの音だった。

金属がきしむ鋭い音に考えごとを中断され、まばたきする。

革張りのハイバックチェアから男が立ち上がったところだった。異様な短軀だった。身長百六十センチ足らずで、体重は百キロ近い。くりくりの坊主頭で鼻の下にまばらな髭を生やしている。華奢な造りの縁なしメガネは、脂ぎった大きな顔にまるで似合っていない。レンズは汚れ、曇っていた。

異形、^{いぎよう}といつてもいい。

男の名前は、風間悠。^{かざまゆう}本名ではなく、ペンネームだった。

ノートパソコンや辞書、コピー用紙の束が乱雑に積み重なっている仕事机の上を白熱灯のついたスタンドが照らしている。黄色っぽい光が温もりを感じさせるのがいい、と風間はいう。仕事机をはさんで向かい側で、麻生里久^{あそりく}は背もたれの直立した、木製の椅子に腰を下ろし、軀をかたくしていた。

風間は欠伸^{あくび}をし、目尻に浮かんだ涙を指先でぬぐうと、コピー用紙の山をかき回し、つぶれかけたタバコのパッケージを取りだした。一本抜き、百円ライターで火をつける。煙を吐きだし、紫色の透明なライターをしげしげとながめた。

「なあ、ライター運の悪いやつは女運も悪いって話、聞いたことないか」

「さあ」里久は首をかしげた。

「おれはライター運が悪いんだ。ロンソン、ダンヒル、ジッポー、色々使ったんだけど、すぐ

に壊れるか、なくしてしまうんだよ。この間もね、金張りのを一つ、なくしたんだ。この部屋から持ちだしちやいないから、いつかひよいと見つかるだろうけど」風間はタバコのフィルタ―を前歯ではさみ、里久の目を見てにやりとする。「誰かが持っていないかぎり」

「誰か持っていくような人でもいるんですか」

「さあね。何しろ十万円だからな。本物の金、噛めば歯形がつく。質屋に持っていけば、それなりの金になるだろ」

使い古しのライターがいくらになるというのか、といいかけたが、里久は言葉を嚙み、身じろぎもしないで風間を見つめていた。

風間がまたにやりとする。

「いいね、君のその怒った顔。きりりとして、本当にいい女だ。宝石だよ。君は、ぼくが出会った中で最高の女だ」

里久は背が低い。彼女はそのことをコンプレックスに感じている。風間は小柄な里久を宝石と呼ぶ。そして宝石という言葉は、里久の肉体の奥にある、もつとも敏感な小粒をも意味している。

嫌悪をあらわすまい、と里久は奥歯を食いしばっていた。

風間は椅子の背もたれに肘をあずけ、短い足を机の上にのせた。角質化したかかとか白くなっている。

「今日も暑かったみたいだね」風間はタバコを指に挟み、周囲を示した。「ぼくはこの部屋から一歩も出るわけじゃないから関係ないけど」

壁に取りつけられたエアコンがうなりを上げ、冷気を吐きだしている。里久の背中がぞくぞくするほど冷房が効いている。風間は室温を十八度に設定し、その中で半袖のTシャツを着、黒のスウェットパンツをはいている。

里久は口を閉ざしたまま、風間を見ていた。

「暑かっただろ」風間が目をすぼめる。

「ええ」里久は声を圧おしだした。かすれている。

「何度あったのかな」

「三十六度、とか」

「けっ」風間は吐き捨て、机の上から足を下ろすと短くなったタバコを灰皿で押しつぶした。

「体温なみか。まったく空梅雨からつゆだと思ったら、中年女の吐息みたいな中に放りこまれてるのと同じじゃないか」

顔をゆがめた風間を、里久は冷静に見ていた。中年女云々という陳腐な比喩は、里久に対するあてこすりだった。

里久はもうじき三十歳になる。

「さて」風間は里久の目を見返した。「そろそろ始めようか」

里久は黙っている。が、風間はお構いなしにつづけた。

「まず、立って。それから、その鬱陶しいジャケツトを脱ぐんだ。まったく三十六度だっていうのに、よくそんなものを着ていられるもんだな」

里久は立ち上がり、藍色に染めた麻のジャケツトのボタンに手をかけた。

「ゆっくりと、だ」風間が鋭い声を飛ばす。「ゆっくりと脱げ」

里久はうつむいたまま、ジャケツトのボタンを外していった。ジャケツトを脱ぐと、ノースリーブのブラウスから剥き出しになった二の腕にさっと鳥肌が広がる。表情を変えずにジャケツトを椅子の背にかけた。

風間に向きなおる。

風間は机の上に身を乗りだし、両ひじをつく。あごを手で支えた。

「腕を上げて」風間はいった。

「はい？」里久が眉間にしわを刻み、訊き返す。

「腕を上げるんだ。右だけでいい。さあ」風間の声に苛立ちがにじむ。

里久は右腕を上げていった。まるで日に当たることのない腕の内側は静脈が青く透け、あくまでも白い。が、二の腕の下側には年齢相応に脂肪がつき、たるんでいる。そのことに羞恥をおぼえた。

風間が生唾を飲む。ごくり、という音がはっきりと聞こえた。

里久は右腕を上げ、ひじを上げて手首をひたいにつけた。風間は電気スタンドの向きを変え、里久を照らす。

「もつとだ」風間は鼻をふくらませていた。「もつと上げろ」

里久はひじを上げた。白熱灯の黄色っぽい光がわきの下を照らしている。風間の視線が腕の付け根のくぼみに注がれている。里久は顔が熱くなるのを感じた。

「いつ、剃った？」風間が押し殺した声で訊いた。

「二、三日前」

「そうだろ。ぼつぼつ黒いものが見える。冬は剃らないんだろ」

「カミソリ負けするから」

「これから剃るな。夏も剃らずに伸ばすんだ」

「そんな」

「伸ばしたまま、ノースリーブだ。わかったな」

「無理」

「腕を下ろせ。いつまで間拔けな格好をしてるつもりだ」風間は背もたれに軀をあずけ、ふたび机の上に足をのせる。目を細め、言葉をついだ。「次はスカートだ。さっさとしろ」

里久は腕を下ろし、腰に右手をやるとスカートのホックを外してファスナーを下ろした。腰を締めつけていた戒めがほどけ、ふいに頼りない気持ちになる。右手でスカートを押さえてい

た。

「手を離せ」風間が命じた。

里久はうつむいたまま、うなずき、右手の力を抜いた。アイボリーのタイトスカートがするりと落ち、足首を包む。

「黒か」風間がつぶやく。「白いブラウスに白のスカート、黒のパンストで、下着も黒か。日常の中の非日常だな。外から見ているだけじゃわからない。なかなかそるじゃないか」

生理が近い。里久が黒い下着を選んだ理由はそれだけだった。そのときになって里久は下着に生理用品をつけたままにしているのを思いだした。

「お願い。トイレに行かせて」

「小便したくなったのか。それとも大きい方か」風間がにやにやする。

「だって、この部屋、寒いから」

里久の答えに、風間は鼻を鳴らした。エアコンのリモコンを取りあげ、ボタンを押す。短い電子音が生きて、エアコンのうなりが消えた。

「停めたよ。熱帯夜だ。窓なんか開けなくなつて、すぐに蒸し暑くなるぞ」風間は机から足を下ろした。

「さて、次はブラウスだ」

「お願い」